'07-4-21

謡い方のポイント（第8回白謡会研究会）

養老

本曲のテーマは、養老伝説を典拠とする、今日ではあまり省みられなくなった親孝行と敬老精神。加えて、神仏混こう（水波）の我が国文化と安泰な治世の徳を讃美する意図が入り混じったものと言えるが、私は、単に本曲は百薬の長である酒を讃えるものであると勝手に解釈している。但し、「酒」という語はひとつも出てこない。全て、薬の水、菊（喜久）の水、玉水などと云った表現であることは興味深い。（「薬」の語は多出）

以上のテーマを基に、終始、新緑の中での清水の奔流をイメージしながらの能であるから、役処も地謡も一貫して爽やかに謡わなければならない。

シテ＝前も後共に、重くれず、力を込めて。特に後シテは、初番物に共通するが、余程気合を入れて謡わないと、囃子が入ったらの仮定ではあるが、声が囃子方の気迫にかき消されてしまうことは必定。素謡でもこのことを意識して謡うべし。

十丁裏一行目の「水音、とおとおと」は、水音で先ず切り、二つめの傍線の「と」以下は三ユリの如く振らせて謡う。かなりのベテランでもこれを上廻しのように謡う人が多いが、それは間違い。（なお、一つめの「と」は上廻しで）

ツレ＝若々しく爽やかに。二丁裏の上歌「長生の家にこそ」の返しはツレの独吟になるが、このような返しのツレの謡はとかく走りがちになるので、声調は高めにしてツレの位を示すべきではあるが、あまりテンポを速めず、シテと同じか、又は心持早めに、いずれにせよ落着いて謡って欲しい。

ワキ＝初番もののワキは剛さが売りであるが、本局では勅使であるから威厳もあって欲しい。自分がシテよりも社会的な地位ははるかに上位であると意識して謡うこと。

俊寛

隅田川に比肩されるほどの大悲劇の曲とされている。現代感覚では、別に無人島ではないだろうし、酒が飲めない程度で何が大悲劇か、仲光や藤戸のほうが余程悲劇性が高いではないか、と思ってしまうが、詞章、曲趣共にそれに相応しいものになっているので、理屈は抜きにして、ときに悲憤慷慨、ときに同情心をもって謡いたい。

シテ＝この世の中で、自分が最も可哀そうな人間であるとの自覚のもとで大いに怒り、悲しみをぶつけて欲しい。それ故にこそ、多少は芝居がかっても良いから、すべての部分において、思い入れと謡いの工夫が必要である。

例えば、最初の一セイの重量感、五丁裏の「あらありがたや」のほとばしる嬉しさ、六丁表の「さては筆者の」の怒り・驚き・悲しみの混交、九丁表の「せめては向かいの」以後何句かの打ちひしがれながらの必死の訴え、ロンギに入ってからの絶望感・・などなど。

なお、クセのアゲハ「せめても思い・・」は、「閑カニ」と注釈が付いているが、この注釈は無視して、万感の想いをぶつける心境を力をこめて表現して欲しい。

ツレ＝康頼も成経もかなり脳天気なキャラ。そしてどこか醒めてもいる点で、俊寛と対象的である。又、そうであらないとシテが引き立たない。

ワキ＝養老のワキと同様、勅使であるが、比較にならぬほど本曲のワキのほうが重くて剛い。俊寛などは虫けら同然と思って謡って頂きたい。

地　＝初同の上歌、クセ共に、詞章といい、節付けといい独立した歌唱としても充分後世に残っていけるだけの存在感がある。それだけに心を込めて謡いたい。

'07-4-30

当麻

重習の曲をはるかに凌ぐほど難易度は高い。私自身も苦手な本だから、齢四十年を越える白謡会の大会でも過去二回しか出していない。最近では十年ほど前に、故山崎八重様にご立派に謡って頂いた。

何処が難しいかと言われると、枚挙に暇がないが、兎に角、全曲難しさの塊のようなもので、終始気を抜くことも出来ないし、遊びもさせてくれない。只、ひたむきに、真面目に向き合うしかないのである。

シテ＝一般論であるが、会などでシテ役に指名されたら、先ず最初に心掛けるべきことは、シテのキャラを理解することであるが、もう一つ付け加えると、前シテが後シテの化身（または幽霊）かどうかをチェックすること。それの有る無しで、謡が一味違ってくる。

本曲は、前と後が全く違う人物であることを認識した上で、謡って頂きたい。

前シテは、所謂、老女物のつもりで、じっくっりと謡えと云われているが、小町のような俗な人ではなくて、阿弥陀如来の化身であるから、自ずから風格が変わってくる（だから謡い難い）。　そして、後は中将姫、衣装は紅入り。従って、引き立てて、格調高く謳い上げなくては、それらしくならない。

技巧の点では、二丁裏の「涼しき道は」の節回しと、」十一丁裏の「慈悲加裕」の間のとり方が重要であるが、他も全て油断禁物。

ツレ＝只ひたすらにシテに付き、シテの引き立て役に徹すること。独自で謡う量は少ないが、力量が必要な役割。観世音菩薩の化身であることも考慮に入れて下さい。

ワキ＝重い三番目もののワキのつもりで、確りと落ち着きはらって、昂ぶらず、確りと。

地　＝本曲の難易度を高めているのは地謡の故でもある。初同は丁寧に、クリ前の地は緩急に、サシの柔から剛への変化する際の音程、キリの多彩な節付けと複雑な間など枚挙に暇なし。十一丁裏の、「乱るなよ」のイロの謡いや同ページの「ありがたや」の間のとり方は何度謡っても難しい。

鞍馬天狗

全編、おおらかに、のびのびと。花見の曲でもあるから、地味になってはいけない。

シテ＝全般的にどっしりと。節付けがそれほど難しくないから、つい運びがちになりがちだが其処をこらえてゆったりと、或いは確りと謡って欲しい。

子方＝シテに匹敵する重要な役柄。あくまでもキッパリと凛々しく。技巧を捨象することが技巧に通ずる。あまり運ばなくても良いようにも思う。

ワキ＝僧ではあるが威厳をもって、強め、重めに。そうしないとシテが引き立たない。

地　＝新撰組の芹沢鴨が愛唱したと言われている二丁表の「花咲かば・・」は短いけれど、花見のときなどは、鴨ならずとも口ずさみたくなる佳曲と云うべきであろう。全ての箇所で、のびのびと、おおらかに。

以　上